

(別紙2 様式)

[普及事項]

新技術名：雪害を受けたリンゴわい性台未結果樹における樹体回復（平成23年）

研究機関名 果樹試験場リンゴ部
担当者 千田さゆり・森田泉

[要約] 豪雪により主幹が折損したリンゴわい性台2年生樹の「秋田紅ほっぺ」と「さんさ」は、主幹切り戻し法と新梢発生促進剤（ビーエー液剤）の利用により、樹高は前年を上回り、フェザーは20本以上となり、定植2年目秋の生育目標である側枝数20本以上を確保できた。

[普及対象範囲]

秋田県内一円

[ねらい]

2011年1月の豪雪により、県南部の果樹では甚大な樹体被害が発生した。リンゴわい性台未結果樹では、主幹の折損や側枝の欠損が多く、迅速な復旧が求められた（図1）。そこで、深刻な樹体被害を受けた「秋田紅ほっぺ」と、その親品種である「さんさ」について、主幹切り戻し法とビーエー液剤の散布により、樹体の回復を図る。

[技術の内容・特徴]

- 1 雪害を受けた「秋田紅ほっぺ」および「さんさ」（JM7台2年生樹）の樹体回復には、次の方法が有効であった（図2）。
 - ①発芽前に主幹を地上60cmの高さで切り戻す。
 - ②切り戻した付近から発生した新梢の中で最も生育の良いものが約20cmの長さになった頃、その新梢を残して他の新梢を基部から取り除く。
 - ③残した新梢（以下、主幹候補枝）に対し、先端部にビーエー液剤50倍を散布する。
 - ④以後、主幹候補枝が20cm伸長するたびに、新たに伸長した部分の先端部に対し、同様にビーエー液剤を散布する（ビーエー液剤の散布回数は合計5回まで）。
なお、主幹候補枝の腋芽から発生した新梢（フェザー、副梢とも呼ぶ）は随時、E型金具を用いて水平に誘引する。
- 2 以上の処理を行った結果、主幹候補枝長は両品種とも約180cm、樹高は約240cmに達し、前年の樹高を上回った（表1）。
- 3 主幹候補枝から発生したフェザーの本数は、「秋田紅ほっぺ」が20本、「さんさ」が25本となり、定植2年目秋の生育目標を上回る回復をした（表1、図3）。

[成果の活用上の留意点]

- 1 野ネズミ被害や紋羽病などで地下部に障害を受けている樹体では、主幹から新梢が発生してこない場合がある。
- 2 この樹体回復方法は、樹齢4年生までの応用が可能である。

[具体的なデータ等]



図1 樹体被害の様子

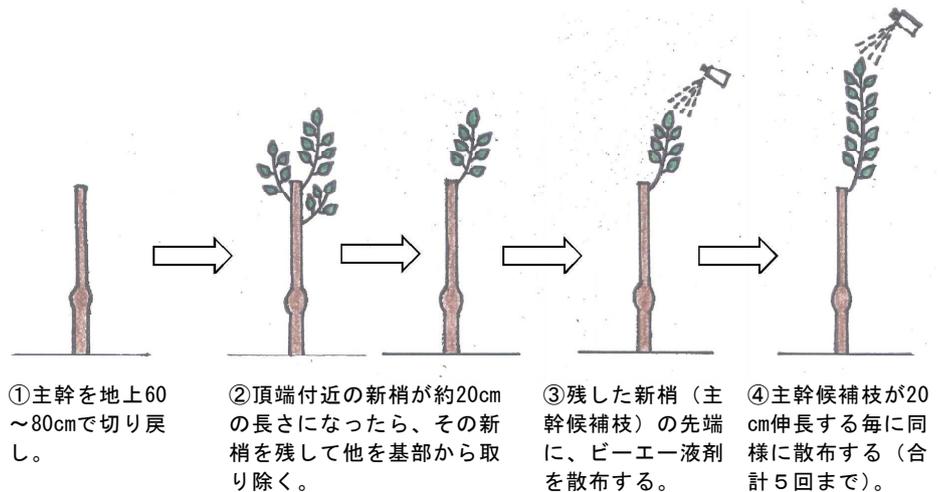


図2 主幹の切り戻しとビーエー液剤の散布手順

表1 主幹切り戻し法とビーエー液剤の散布による「秋田紅ほっぺ」と「さんさ」の樹体生育状況（2011年）

試験樹	2010年秋		2011年秋		フェザー発生 ^z					平均長 (cm)	総長 (cm)
	樹高 (cm)	樹高 (cm)	主幹候補 枝長(cm)	主幹候補枝 直径(mm)	長さ分布(本/樹)				合計		
					5cm 未満	5～ 30cm	30～ 50cm	50cm 以上			
秋田紅ほっぺ /JM7	186±8 ^y	239±15	181±15	18.4±1.4	1.3	3.7	3.0	11.7	19.7±4.0	46.4±3.9	903±139
さんさ/JM7	206±18	240±23	184±20	12.9±1.0	2.7	11.7	8.3	2.3	25.0±2.6	27.1±2.5	674±46

^z 長さ2cm以上のフェザーを調査

^y 平均値±標本標準偏差

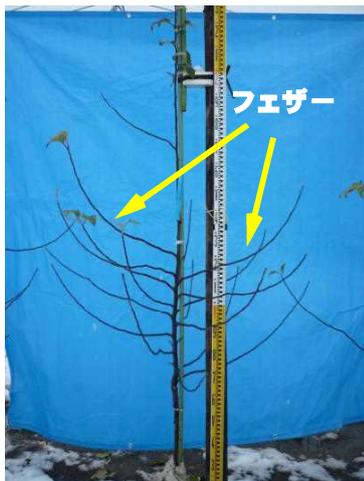


図3 「秋田紅ほっぺ」/JM7（2011年12月撮影）。フェザーが多数発生している。

[発表文献等]
なし